

精神現象學の成立史

——ヘーゲル精神現象學の研究

米倉守

一 問題の提起

或一つの哲學的著作が如何にして成立したかは、その著作の内容の理解にとつては、一般に外面的な事柄でしかない。がそれが多少でも著作の内容の理解に關はる場合には、それを素通りすることも出来ない。そしてヘーゲルの精神現象學は、正にそのやうな場合の一つである。それで、私も精神現象學の研究を先づこの問題から始めたいと思ふ。

この問題は、今日では結局ヘーリングの見解に對してどう云ふ態度を取るかと云ふことに歸着する。周知のやうに、一九三三年四月ローマで開かれた第三回ヘーゲル學會の席上に於て、ヘーリングは「精神現象學の成立史」と云ふ演題の下に、從來誰も豫想しなかつたやうな研究成果を發表して、人々を驚かせた。それによれば、『現象學は、ヘーゲルに於て念入りに熟考され長い間胸中に抱かれてゐた計畫に基づいて、彼のそれまで

の發展から有機的に生じたものではなくして、極めて唐突な、內的外的の壓迫の下に固められた決心の結果として、殆んど信ずることも出来ない程の短い期間の間に、而も印刷するために一部分づつ次々に書きつがれて行つて出来上つたもので、その間その意向も決していつも同一であつたのではない、そしてそれは、この著作の名稱だけのことではなくして、實はこの著作の實際の内容も範圍も、印刷中に始めて今日のやうなものになつたのである』と、これが總括的なヘーリングの結論である(Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 119)。彼は、イエナ大學におけるヘーゲルの講義表や當時の往復書翰等を資料にして、現象學の成立の經緯を細さに調べ上げ、そこからこのやうな結論を導き出した。その所論は、一々精確な資料に裏づけされてゐるから極めて説得力に富んでゐて、今日のヘーゲル研究者たちは大抵これに對して肯定的な態度を取つてゐる。ラッソンの後をうけてヘーゲル全集の新しい出版に當つた

ホフマイスターも、フランスのヘーゲル學者として著名なイポリットも全面的にこれを採用してゐる、わが國の金子博士も大體さうである。私の知る限りでは、グロックナーとルカーチとがそれに對して批判的態度を示してゐるだけである。グロックナーの批評については後で觸れるが、ルカーチはただヘーリングの結論を「才氣走つた假説」と評し、どうして彼がそのよくな假説に導かれたかを、一般にマルクス主義思想家たちがよく用ゐる慣用の論法で、「ファッシストのヘーリング」は、嘗て「國民自由主義者のハイム」がさうであつたのと同様に、現象學のヘーゲルが「非愛國的」であつた所から、このやうに現象學を「即興的なるもの」「暫定的なるもの」と見る、現象學の意義を蔑視するやうな假説に導かれたのである、と断定するだけで、ヘーリングの研究の土臺をなす實證的資料の検討には全然立入つてゐない (Der junge Hegel, S. 572-573)。これではただ外的に反駁するだけで、ヘーリングの所論の內實的な批評にはならない。學問はただ人をファッシストだとか、帝國主義者などと烙印するだけでは終らない。がヘーリングの「成立史」を讀むと、さう「認められる」(annehmen)とか、「推測される」(vermuten)とか、「可能なる」(möglich)とか、「本當らしい」(wahrscheinlich)と云ふやうな、推測的推定的な結論が多すぎる。そして最後の總括的な結論もまた、結局は「さうらしい」(wahrscheinlich)と云ふ蓋然的推定、推測的假説より以上には出てゐない。それを斷定的にすることの出来る確かな證據はない。そこに、ルカーチの所謂「才氣走つた假説」と評

せられてもやむを得ないものがある。が併しそれだからと云つて、ヘーリングの所論を正すことの出来る反對の資料もない。とすれば、ヘーリングの所論に對しては、今日の多くの信賴すべきヘーゲル研究家たちと同様、私も大筋に於ては肯定的態度を取らざるを得ない。それで、私も一應彼の論述と、それを多少補正して手際よく纏めたホフマイスターの現象學解題の「三」の敘述とを參考にしながら、私の觸れ得る限りの資料に基づいて、現象學の成立の經緯を探つてみたいと思ふ。

先づどうしてこのやうに精神現象學に關しては、特にその成立の事情が問題になるかと言へば、それは恐らく、一つには内部的に、精神現象學がそれ自身一つの纏まつた著作としては或種の不整合と不統一を持つと云ふことと、二つには外部的に、それが既に印刷され出してからその途中に於て出版書肆との間に激しい紛争のあつたことを物語る數通の書翰が残つてゐて、それがヘーゲルの方に於て或は途中構想の變化と云ふやうなことがあつたのではないか、そのために一時起稿の停滞を來たして、それが一部この紛争の原因になつたのではないかと云ふやうな疑ひを起させるものを持つてゐるからである。

先づ現象學それ自身の持つ不整合としては、外形的と內實的との二つの方面から指摘することが出来る。外形的には、一、現象學には同じやうな資格を持った表題が三つ附けられてゐる、二、章節の區分が二重になつてゐる、と云ふことである。

一、表題について——私は精神現象學の初版本を見たことはないが、ラッソンやホフマイスターがその編輯にかかる現象

學の末尾に於て「テキストの確定に關して」語つてゐる所に從へば、初版本の現象學には三つの表題がある。第一の本表題は言ふまでもなく「ゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルの學の體系、第一部、精神の現象學」と云ふのであつて、これは開卷初頭に、頁で言へば第三頁に、目次や序文の前に置かれてゐる。初版本ではこれに續いて六頁（これは頁づけされてゐない）の目次があり、その次にローマ數字で別に頁づけされた九十一頁の序文が置かれ、次に三頁（これもまた頁づけされてゐない）の正誤表がある。その次からアラビア數字で頁づけされた七百六十五頁の本文（序論 *Einführung* を含む）が始まるのであるが、その第一頁がまた表題紙になつてゐて、そこには「第一部、意識の經驗の學」とある。この二つの表題のうち、第一の本表題は無論初版本の何れにもあつて、固定して動かないが、第二の表題の方は大抵はあるが、稀にそれを缺くものもあるさうである。例えばグロックナーの所蔵してゐる本にはそれが無いさうで、彼はそのヘーゲル研究の中で、「序文の後に第一部意識の經驗の學と云ふ中間表題を持つてゐる本がある」と言つて、寧ろそれのある方を異例としてゐる（*Hoffmeister, Zur Feststellung des Textes, S. 577; Glockner, Hegel, II, S. 416*）。が併しこの二つの表題は大體安定してゐて、その位置も狂はないが、現象學の初版本にはこの外にも一つ極めて不安定な「一、精神の現象學の學」（*U. Wissenschaft der Phänomenologie des Geistes*）と云ふ表題を持つてゐるものがある。これは初版本の印刷では序文の第六ボーゲンの最後

精神現象學の成立史

のプラットに印刷されてゐるやうである（*Lasson, Zur Feststellung des Textes, S. 565*）。さうすることこれは當然序文のすぐ後に置かれねばならないわけであるが、どうしたことかこの表題紙の位置は本によつてまちまちで、正誤表と第二の表題紙との間にあつたり、或は第一の本表題紙の前に、從つて見返しのすぐ次に置かれてゐたり、（ロータッカー所蔵の初版本はさうなつてゐるさうである）、或はまた第二の表題を押しつけてその位置に来てゐたり、（グロックナー所蔵の初版本はさうなつてゐる）、或はまた全然この表題紙のない本もあるさうである（*Hoffmeister, Zur Feststellung des Textes, S. 577*）。ヘーゲルが最後の決定した表題は言ふまでもなく第一の、「學の體系、第一部、精神の現象學」であるに相違ないが、これと他の表題とは内實的に、また時間的にどう云ふ關係にあるか。第三の表題は、それがあつたり無かつたり、また位置が狂つてゐたりすることから、これは或はヘーゲルは最後には削除する積りではなかつたか、それが一部をここに取殘されたのは、校正の不徹底からさうなつたものではないか、と推測されるが、これは意味の上からは全く第一の本表題と同じで、恐らくその前身をなすものであらう。がそれはともかく、このやうに三つもの違つた表題がここに、あると云ふことは、一つの纏まつた著作としては如何にも不體裁で、どうしてさう云ふことになつたかと云ふ疑問が當然起つてよいわけである。

(一) これはラッソン版やホフマイスター版ではやはり原版と同じ箇所、即ち目次や序文の前に、但しこれらの版には

編輯者の解題が附けられてゐるから、その後には置かれてゐる。金子博士の譯書では、舊譯本ではやはり同じ箇所には寫眞版にして載せられてゐたが、改譯本ではどう云ふわけか目次の後、序文の前に置換へられてゐる。この表題の成立については本文の中で精しく述べる。

(二) これはラッソン版やホフマイスター版の本では、やはり原版の體裁を保持して、原版と同じ箇所は、即ち序文の後、序論の前に置かれてゐる、兩版とも六十一頁にある。シュルツェの全集版ではこの表題は削除されてゐる。従つてそれのそのまゝの覆刻である今日のグロックナー版にもこの表題は載せられてゐない。金子博士の譯本では、舊譯本にはこの表題はなく、そのあるべき場所に、次に述べる第三の表題「一、精神の現象學の學」が載せられてゐたが、改譯本では多分ホフマイスターの「テキストの確定に關して」の所論に基づいてであらう、この「第一部、意識の經驗の學」に取替へられてゐる(舊譯本一〇五頁、改譯本五九頁)。本文の中で明らかにするやうに、これが最初に定められた表題で、精神現象學はこの表題の下に書出されて、それが後で精神現象學と改題されたものやうである。この點は、ヘーリングの成立史が發表される前に、(それが發表されたのは一九三三年四月第三回「ヘーゲル學會に於てである」)、既にラッソンもそのやうな見解を表明してゐる(Lasson, Zur Feststellung des Textes, S. 565)。ヘーリングの成立史が發表されてからは、それがもう殆ん

ど定説のやうになつて、イポリットやホフマイスター等の代表的なヘーゲル學者たちも、わが國では金子博士も、皆それを採用してゐる、ヘーリングの成立史に對して批判的なグロックナーも、この點に關しては同じやうな見解を表明してゐる(Hypothese, Genèse et Structure de la Phénoménologie de l'Esprit, p. 54 sq. Hoffmeister, Einleitung des Herausgebers, S. XXXVIII u. f. Zur Feststellung des Textes, S. 577; Glockner, Hegel, II, S. 416.)。

(三) このやうに學名の上に更に「學」(Wissenschaft)を附けて莊重に言顯はすのは、ヘーゲルが時折用ゐる表現法で、一番代表的なのはニュールンベルグ時代の大論理學の「論理學の學」(Wissenschaft der Logik)であるが、その外にもやはり論理學の中に、「數學の學」(die Wissenschaft der Mathematik)と云ふやうな言顯しを見出される(Wissenschaft der Logik, I, S. 293, 317)。

(四) これはラッソン版の現象學では序文のすぐ次に、従つて第二の表題と向ひ合つた前の頁(第六〇頁)に載せられてゐたが、ホフマイスター版では削除されてゐる。金子博士の譯本では、前の註「二」で述べたやうに、舊譯本には載せられてゐたが、改譯本では第二の表題と取替へられてゐる。

二、章節の區分について——次に精神現象學には二重の章節の區分がある。一つはローマ數字による區分であり、もう一つはABCの字母による區分である。前者によれば、現象學は單

純に次のやうな八つの章から成る。

- 一、感覺的確信、このものと思念
 - 二、知覺、物と錯覺
 - 三、力と悟性、現象と超感覺的世界
 - 四、自己確信の眞理性
 - 五、理性の確信の眞理性
 - 六、精神
 - 七、宗教
 - 八、絶對的知識
- ところがA B Cによる區分は、
- A、意識
 - B、自己意識
 - C、(A A) 理性
 - (B B) 精神
 - (C C) 宗教
 - (D D) 絶對的知識
- となつてゐて、少しくこみ入つてゐる。兩者を組合はせると、
- A、意識
 - 一、感覺的確信、このものと思念
 - 二、知覺、物と錯覺
 - 三、力と悟性、現象と超感覺的世界
 - B、自己意識
 - 四、自己確信の眞理性
 - C、(A A) 理性

精神現象學の成立史

五、理性の確信と眞理性

(B B) 精神

六、精神

(C C) 宗教

七、宗教

(D D) 絶對的知識

八、絶對的知識

となる。これが一般に現象學に附けられてゐる章節の區分である。一見して分かるやうに、ローマ數字による區分の「一、感覺的確信」と「二、知覺」と「三、力と悟性」とが「A、意識」に纏められ、それに對應して、「四、自己確信の眞理性」と「五、理性の確信と眞理性」とがそれ／＼「B、自己意識」と「C、理性」と云ふより單純な表題に言直されることは、無理なく了解される。が「理性」と「精神」以下とはどう云ふ關係になるか、ローマ數字による區分では、「五、理性の確信と眞理性」に對して、「六、精神」以下はより高い發展段階として、同じ資格に於てそれに後續させられてゐる。若しこの考へ方を貫くならば、「精神」以下は「D、精神」「E、宗教」「F、絶對的知識」とならねばならぬであらう。若しまた、「一、感覺的確信」「二、知覺」「三、力と悟性」を「A、意識」に纏めたやうに、「六、精神」以下を「C、理性」の中に包括させるならば、「六、精神」「七、宗教」「八、絶對的知識」だけでよく、「(B B) 精神」「(C C) 宗教」「(D D) 絶對的知識」の見出しは無用になる。この(A A)(B B)(C C)(D D)は、「(B B)

「精神」以下が「C、理性」の中に含まれるやうでもあり、また含まれないでそれに對立するやうにも解せられ得るものを持つてゐる。現象學の後の出版に於ては、この二重の區分が何れも本文の中にまで入れられてゐるが、初版本に於ては、ABCによる區分は目次の中にあるだけで、本文の中にはないやうである (Hoffmeister, Zur Feststellung des Textes, S. 575; Lasson, Zur Feststellung des Textes, S. 565)。この點から Hofmeister ターは、ラッソンも同様、ローマ數字による區分の方が元のもので、ABCによる區分は後から印刷の途中に加へられたものであらうと言つてゐる (Hoffmeister, Zur Feststellung des Textes, S. 575; Lasson, Zur Feststellung des Textes, S. 565)。ヘーリングは、前半「理性」までの原稿にはABCによる區分があつたが、後半「精神」以下の原稿にはそれが無かつた、即ち前半は「A、意識」「B、自己意識」「C、理性」と分けられてゐたが、後半にはこのやうな字母による區分はなく、たゞローマ數字による區分だけで、「六、精神」「七、宗教」「八、絶對的知識」となつてゐた、それを出版者たちが後から、前半と歩調を合はせるために、「C、理性」を「C、(A A) 理性」と補正して、それによつて「精神」以下を「(B B) 精神」「(C C) 宗教」「(D D) 絶對的知識」として、この不整合を繕つた、がこれは後の哲學總論の中の精神現象學の區分に無理に合はせたもので、哲學總論時代の考へをそのまま、すぐに現象學當時のヘーゲルに當てはめることは正しくない、と云ふのは、現象學を書く頃には、ヘーゲルはまだ精神現象の全體を意

識と自己意識と理性との三つに分ける分け方を持つてゐなかつた、このことはその直前に書かれたもの、殊に一八〇五年から六年にかけての精神哲學の講義の草稿からも明かである、とヘーリングは言つてゐる (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 129-130)。が「C、(A A) 理性」「(B B) 精神」「(C C) 宗教」「(D D) 絶對的知識」と云ふ見出しも、本文の中には入れられてゐないにしても、少くとも原版の目次の中にある以上、これを編輯者たちが後から勝手に附け加へたものとは考へにくい。やはりこれもヘーゲル自身に由來するものと受取るのが自然であらう。ラッソンや Hofmeister も、先に述べたやうにさう解してゐる。がそれはともかく、現象學の章節の區分にこのやうな不整合のあることは認めざるを得ない。これもまた現象學の成立が十分に計畫的でなかつたことを豫感させる。

現象學の内的不統一——精神現象學の敘述に一つの龜裂又は飛躍のあることは、注意深い讀者ならばすぐ氣づくことで、クローノー・フィッシャー以來多くの研究者たちによつて指摘されてゐることである。尤もその場所は人によつて少しく異なる、クローノー・フィッシャーは「C、(A A) 理性」の章から現象學は「相等しくない二つの部分」に分かれると言つてゐるが (Hegel, I, S. 341)、他の研究者たちは大抵「(B B) 精神」の章からとする。こゝからは確に場面が變はる。これはヘーゲル自身も明かに認めてゐたことである。と云ふのは、「(B B) 精神」の章の始めに於て彼は次のやうに言つてゐる、『これか

らの形態は今までの形態とは異なる。それは、これからの形態は實在する精神であり、本當な現實であつて、たゞの意識の形態であるのではなくして、一つの世界の形態であるからである』と (S. 336)。対象が主観的な意識から客観的な實在する精神に變はるのである。後のヘーゲル哲學の用語を以て言へば、主観的精神から客観的精神に轉するのである。ここまでは正に「意識の經驗の學」の領域であつたが、こゝからは寧ろ「精神哲學」の領分である。それでホフマイスターは、精神現象學の全體を外面的に見れば、それは「意識の經驗の學」(「五、理性の確信と眞理性」の章まで)と「精神の哲學」(「六、精神」の章以下)との二つの部分から成る、と言つてゐる (Einleitung des Herausgebers, S. XXXV)。イポリットや務臺博士は、現象學の前半から後半への移行の中にこのやうな思想や敘述上の龜裂や破綻は認められないが、やはりそこに一種の立場の變更、飛躍、轉換と云つたやうなもの行はれてゐることは認められる。即ち現象學はこゝで、個人的意識の現象學から精神一般の現象學に、主観的精神の現象學から客観的精神の現象學に飛躍的に轉進してゐると解釋される (務臺博士、ヘーゲル研究、一頁、七六頁—七七頁、その他。Hypopolite, Genèse et Structure de la Phénoménologie de l'Esprit, p. 58, 65, 71)。この内面的な敘述の不統一を、前に述べた字母による章節の區分の不整合やいくつもの表題のあることなどと考へ合はせる時、現象學は始めから終りまで一貫した統一的理念の下に計畫的に著作されたものではないのか、と云ふやうな疑念を抱

かせられるのである。

起稿の停滞、出版書肆との紛争——『僕の著書がようやく出来上りました。がその献本を友人たちに寄贈するに當つても、あの出版や印刷の全過程を支配したのと同じ不愉快ないざこざが、そしてそれはまた一部分著作そのものまでも支配したのであるが、それと同じやうな面白くない紛糾が、献本の寄贈に際してもまた起りました。さう云ふわけで貴兄のお手許にはまだ献本をお届けして居りませんが、すぐ一部お届けするやうにしたいと思つてゐます』と、これはよく引用される一八〇七年五月一日附のシュリング宛の手紙の中の一節であるが、ちやうどこゝに記されてゐる「あの出版や印刷の全過程を支配した不愉快ないざこざ」を、「一部分はまた著作そのものまでも支配した面白くない紛糾」を、裏書するやうな數通の書翰が残つてゐる。これはもうヘーゲル研究者たちにはよく知られてゐることで、今更詳しく述べる必要もないが、順序上一通り觸れるれば、出版書肆ゲーブハルトとの最初の契約によれば、前半分の印刷は復活祭(一八〇六年の)までに出来上らせること、さうしたならば原稿料の全額(一ボーゲンにつき十八フロリン)を支拂ふこと、と云ふことになつてゐた (Karl Hegel, Briefe von und an Hegel, I. S. 62; Hoffmeister, Briefe von und an Hegel, I. S. 113, 462)。ところが一向にこの約束が履行されないので、金に困つたヘーゲルは切りに督促したが、出版者のゲーブハルトの方では却つて全體の原稿の提供を要求した。さうでなければどこまでが半分であるか分からないと云ふのである。こ

れが紛争の原因である。その頃（一八〇六年の八月）までに引渡されてゐた原稿は始めの方の全判二十一枚分で、これは初版本の頁に直して大體三百三十六頁分に當つて、ちやうど「C、(A A)理性」の章の終までになるやうである（Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 127, 129）。ヘーゲルはこれが全體の半分であることを主張して約束の履行を迫つたらしいが、ゲーブハルトの方ではそれに應ぜず、終に「手紙の上での議論」になつて片付かず、業を煮やしたヘーゲルはとうとうニートハンマーに頼んで仲に入つてもらふことにした。これが一八〇六年の八月六日のことである（同日附ニートハンマー宛書翰）。ヘーゲルの方の切なる希望は、「どうか出来るだけ決裂させないやうにしてほしい」と云ふことであつたやうである（一八〇六年九月十二日付ヘーゲル宛ニートハンマー書翰）。それでニートハンマーは自らゲーブハルトと交渉して、残り半分の原稿は十月十八日までに全部送達する、若しそれまでにヘーゲルが原稿を送らなかつた場合には、既に印刷されてゐる部分（即ち全判二十一枚分）の全部數を、一全判十二フロリンの割で、ニートハンマーが自分で引受ける、その代りゲーブハルトの方では、原稿が約束通り送付されたならば、全判二十四枚を全體の半分として、その分の原稿料を二期に分けて支拂ふ、と云ふことに協定が成立した。これが九月二十九日のこと（Karl Hegel, Briefe von und an Hegel, I. S. 62; Hoffmeister, Briefe von und an Hegel, I. S. 462）。その頃ヘーゲルの原稿がどの邊まで進んでゐたか、これは無論知る由

もないが、その後は恐らく「休みなく晝夜兼行夜に日をついで憑かれたやうになつて書き續けられたのであらう」（Glockner, Hegel, II. S. 415）。そしてその最後の部分が出来上つたのは、十月十三日の夜半、イエナ會戦の前夜のことである（一八〇六年十月十八日付ニートハンマー宛書翰、一八〇七年五月一日付シェリング宛書翰）。この間僅かに二週間である。この間に原稿は三回に分けて送られてゐる。第一回は十月八日、次は十月十日、そして最後の部分は、十三日の夜書き上げられたが、戦争のために郵便が杜絶して送られなかつたので、ヘーゲルは約束の期日（十月十八日）に遅れることを氣遣ひながら、戰禍を避けるために同夜書いたニートハンマー宛の手紙と一緒にポケットに入れて持ち廻り、二十日に最初の郵便車が出るからそれで送る、と十月十八日付のニートハンマー宛の手紙に書いてゐる。ヘーゲルはこの最後の部分を「僅か數ボーゲン」と言つてゐるが、一ボーゲンは十六頁分に當たるから、書物にすれば數十頁になるわけである。この點から推して、後半の原稿の相當の部分がこの間に書かれたものと推測される。ところで前半分の印刷は既に二月に始められてゐる（一八〇六年八月六日付ニートハンマー宛書翰）。そしてそれは最初の契約によれば復活祭までに出来上らねばならなかつた。それが八月頃まで延々になつてゐる。出版書肆の方の言ひ分によれば、それは後半の原稿がもたらへなかつたからのであるが、この印刷の停滞、後半の原稿の遅延は何に由來するか、これを先に述べた表題の變更や章節の區分の不整合等と考へ合はせる時、何かそこにへ

ーゲルの方に於て構想の變化とか、計畫の變更と云ふやうなことがあつたのではないか、と云ふやうな疑念を起させられるのである。

(一) この點に關してホフマイスターは、一八〇六年八月六日付ニートハンマー宛のヘーゲルの書簡に附せられた註の中で次のやうに言つてゐる、『出版者ゲーブハルトは書物をバンベルグのラインドルで印刷させてゐたことが、思ふにヘーゲルには知られてゐなかつたやうである』と (Hofmeister, Briefe von und an Hegel, I. S. 461)。因にゲーブハルトはバンベルグとヴュルツブルグの二箇所に店を持つてゐた。

かう云ふわけで、現象學に關してはその成立の經緯が問題になるのである。本来ならば「精神現象學」と云ふ明確な統一的理念の下に終始一貫計畫的に著作されたものであらうと受取られるのが當然であるが、そして又さう長い間受取られて來たのであるが、それを疑はしめるやうな事情が右に述べたやうにいくつも存在するのである。それでヘーリングはその頃のヘーゲルの書簡や遺稿等を丹念に調べて、最初に引用したやうな見解に到達したのである。それを更に敷衍して彼は次のやうに言つてゐる、『もう少し精しく言へば、次々にいつも新しい腹案を持つて献身的に研究に打込んでゐるにもか、はらず、まだ近々のうちには各學期ごとに約束して來た自分の全體的體系を公刊し得るまでに成熟させ得ないであらうと云ふ認識の下に、そして最後には——イェナ時代の初期に公にした比較的一般的な内

容を持つたいくつかの論文の外に——少くとも自分自身の獨立した研究のおぼろげな觀念だけでも一層廣い範圍の人々に知らせたい、(このことは彼より五つ年少の友人にして同僚であるシェリングには既にもう十年前から達成されてゐた)、と云ふ内的外的の壓迫の下に、ヘーゲルはやうやく——そしてそれは明かに一八〇五年から一八〇六年にかけての冬のことであるが——自分の體系の第一巻として、先づ以て「入門」と、(これは併し明かに極めて短いものに考へられてゐた、そして今日の現象學と云ふ名稱も内容もまだ持つべき筈のものではなかつた)、論理學とを出版しよう、と云ふ決心を固めた。ところがそれを書いてゐるうちに、而も出版契約も既に締結された後になつて、彼のこの「入門」は起稿中大きくなつて行つた。そして一八〇六年の中頃になつても、彼はまだそれが一體どれ位の大きさになるのか告げることが出来なかつた。論理學をもこの第一巻の中に含めようとする考へは、さう云ふ理由から益々後退して、終には全く姿を消した。そして「入門」が益々自己目的になつて、(それでそれはまた、それも明かにやつと一八〇六年の中頃になつてのことであるが、特別な名稱をも、而もそれは「精神の現象學」と云ふ名稱をも持つやうになつた)、それからヘーゲルは益々彼が既に前から持合せてゐた「精神哲學」の手持材料の中から、そして一般に彼の「全體的體系」の中から、出来るだけ多くのものをその中に織り込んで行つた。かくして「現象學」の終りは——そして一般に第二部の全體は——終にはその頃の彼の全體的體系の終りと混同されるまでに

それに似て來た。そして又その上對象もその中で極めて廣汎な敘述を受けて、そこまで擴張されるれば、それは最早ただの體系への「入門」にはふさはしくなく、むしろ一つの精神哲學にふさはしいものになつた。そして而もこのことがすべて、ヘーゲル自身まだこの著作に取りかゝる直前まで、繰返し力強く、否皮肉にも、さう云ふ自分の體系への入門の可能性と價值とに對して、一般に反對の考へを表明してゐたにも關はず、このやうなことが行はれたのである』と (Verhandlungen zum Drien Hegelkongress, S. 119-120)。

これがヘーリングの總括的な結論である。彼はこれを、イエナ大學に於ける各學期毎のヘーゲルの講義表と、當時の書簡と、遺稿とを基礎にして、着實に根據づけて行つた。私はそれを、一、著作の動機と、二、成立の過程と、三、完成、との三つに分けて述べてみたいと思ふ。

二 著作の動機

後の哲學總論や法哲學綱要の序文の中では、その著作を思ひ立つた直接の動機が語られてゐるが、精神現象學に於ては、後の大論理學と同様、それが書かれねばならなかつた論理的並びに歴史哲學的の必然性が、言葉を換へて言へば、現象學の學的必然性が、その序文や序論の中では詳しく説かれてゐるだけで、著作の動機については何事も語られてゐない。それで現象學の著作の動機については、勢い周圍の資料から推して考へて

行くより外はない。その場合一番有力な手懸りになるのは、イエナ大學に於ける講義表とその頃の書翰とである。前者については、私としては無論直接現物を見る機會を持つことが出来ないが、クローノー・フィッシャーがその近世哲學史のヘーゲルの卷の中にイエナ大學の圖書館に保存されてゐる講義表から轉載してゐるものを見ると、ヘーゲルは早くから著書公刊の意圖を持つてゐたことが窺はれる。ヘーゲルは一八〇一年八月イエナ大學の私講師になつて、その年の冬學期から講義を始めてゐるが、翌一八〇二年の夏學期の講義豫告を見ると、そこには、『論理學と形而上學を、或は反省と思惟の體系を、同じ表題の下に出るであらう書物によつて、五時——六時、次に自然法と市民法と萬民法とを、口述で、三時——四時、講義するであらう』とある。また次の一八〇二年から三年にかけての冬學期にも、『(一) 論理學と形而上學を、今度の大市に出るであらう書物によつて、六時——七時、(二) 自然法を口述で、一〇時——十一時、講義するであらう』とあり、その次の一八〇三年の夏學期にもやはり、『(一) 全哲學の梗概を、夏中に(チュービンゲンのコッタから) 出るであらう綱要の中から、次に、(二) 自然法を口述で、講義するであらう』とある。かう云ふ風に、ヘーゲルはどの學期にも著書が「出るであらう」(prodrum)と豫告してゐる。ここから彼に強い著書公刊の意圖のあつたことが窺はれる。そしてその内容はいつも「論理學と形而上學」である。かう云ふ風に論理學と形而上學とを並べ稱するのは、この頃のヘーゲルの癖で、これは最後にはニュールンベ

ルグの大論理學に完成されて、内實的には結局論理學即形而上學となるものである (Wissenschaft der Logik, I. S. 16)。そして一八〇三年夏學期の「全哲學の梗概」(philosophiae universae delineatio) は部門分けされてゐないが、多分次の冬學期の講義表を見ると、そこにははつきり部門分けされて示されてゐる、(a) 論理學と形而上學或は超越的觀念論と、(b) 自然哲學と、(c) 精神哲學、とを含む思辨哲學の體系』に近いものであつたのであらう。ここに始めて「思辨哲學」(philosophia speculativa) と云ふ表現が用ゐられてゐるが、ここではそれが、(a) 論理學と形而上學と——これはまた「超越的觀念論」(Idealismus transzendentalis) とも言換へられてゐる——(b) 自然哲學と、(c) 精神哲學」との三部門から成るやうに考へられてゐる。これは後の哲學總論の體系と同じものである。さうすると、この頃ヘーゲルが企圖してゐた著作は、後の哲學總論を想はせるやうなものであつた、と推測して大體間違ないであらう。そして一八〇三年の夏學期に對しては、「夏中にはチュービンゲンのコッタから出るであらう」とまで豫告されてゐる。ここには明かに出版書店の名前まで出されてゐるのであるから、或程度まで出版についての具體的な交渉もあつたものと推測される、がどう云ふわけかこれは實現されなかつた。『それについては一部の外的の障害も原因をなしてゐたかも知れない、が併しまた、ヘーゲルが絶えずその哲學の細目を改變してゐたと云ふことも、彼の内面的躊躇を惹起したものであることは、同様にありさうなことである。』とローゼンクランツは推

測してゐる (Hegels Leben, S. 201)。つまり著書にして出すまでには、まだヘーゲルの思想が十分固まつてゐなかつたのである。それでその後は暫く著書の公刊を見合はせたらしく、次の一八〇三年から四年にかけての冬學期の講義豫告の中にも著書出版のことは出て來ない。が講義の内容はやはり、「思辨哲學の體系」とか(一八〇三年から四年にかけての冬學期)、「哲學の全體的體系」(一八〇四年の夏學期)となつてゐて、それがやはり「論理學と形而上學」と、「自然哲學」と、「精神哲學」との三部門に分けられてゐる。そしてそれを「口述で (ex dictis) 講義する」と言つてゐる。ところが一八〇五年の夏學期になると、また著書公刊の豫告がなされる。その講義表を見ると、そこには、「哲學の全學を、即ち、(a) 思辨哲學(論理學と形而上學)と自然哲學と精神哲學とを、夏中に出るであらう書物で、夕方六時——七時、(b) 自然法を同じ書物で、四時——五時、講義するであらう」と記されてゐる。ここでは「哲學の全學」(totam philosophiae scientia) が、「思辨哲學」と——これは括弧して「論理學と形而上學」と言換へられてゐる——「自然哲學と精神哲學」と——これは次の冬學期になると、「實在哲學」(philosophia realis) と總稱されるが、ここではまたさう呼ばれてゐない——「自然法」との三部門に分けられ、それを一卷の書物にして出さうとする意圖が窺はれる。がこの計畫もまた實現されないで、次の一八〇五年から六年にかけての冬學期の講義表にも著書公刊の豫告はなされてゐない。がその頃ヘーゲルが自著出版の意圖を持つてゐたことは疑はれない事

實で、このことはその頃友人たちとの間に取交はされた書翰からも確かめられる。一八〇五年の初夏の頃のものとしてされるフオス宛の書簡の草稿(手紙の原文は失はれて草稿だけが残つてゐる)には、『研究成果を秋には哲學體系として出すやうになりませう』とある。また同年十一月十五日付のカストナーからヘーゲルに當てた手紙には、『シェリングを訪ねたことを述べて、『シェリングは貴兄の哲學體系を見たがつてゐる。』貴兄の體系をすぐ印刷するやうにお勧めしたい。』と書かれてゐる。ラングも同年十二月四日付のヘーゲル宛の手紙の中に、『貴兄の著作の出版を急ぎ給へ』と書いてゐる。これらの手紙から推して、當時一般に友人たちの間に、ヘーゲルに自著出版の、而も彼自身の「哲學體系」の著作公刊の計畫のあつたことが知れわたつてゐたことが窺はれる。これは、どこかの大學で教授の地位を得たいと望んでゐたヘーゲル自身の願望にもつながり、友人たちの勧めや勵ましもそれに對する配慮に關係してゐた。とすれば、ヘーゲルとしても、この友人たちの好意と期待とに副ふためにも、どうかして早く自分の哲學體系を著書にして公刊したいと云ふ念願に驅られてゐた事情が想像される、それが度々の豫告にも關はず實現しなかつたのは、結局はヘーゲル自身の研究がまだそこまで十分成熟してゐなかつた爲と取るより外はない。

(一) この講義表は、金子博士も指摘されてゐるやうに(ヘーゲルの國家観、五一六頁)、クローノー・フィッシャーがその近世哲學史の中に(Hegel, I. S. 64-65) 載録してゐるも

のと、ローゼンクランツがその「ヘーゲル傳」の中に(Hegels Leben, S. 160-162) 擧げてゐるのでは、少しく異なつてゐる。が私はクローノー・フィッシャーのものと、それを再検討して少しく補正したヘーリングのものゝ正しいとして取りたい。

越えて一八〇六年の夏學期になると、また著書出版の豫告がなされる。そこにはかうある。(a)純粹數學を、即ち算術學はシュタールの「純粹算術學の基礎」第二版の書物で、二時——ローレンツの「算術學幾何學綱要」第二版の書物で、二時——三時、(b)思辨哲學或は論理學を近く出るであらう自著「學の體系」で、四時——五時、(c)自然哲學と精神哲學とを口述で、六時——七時講義するであらう』と。これは一八〇六年の夏學期のための講義豫告であるから、慣例上前の冬學期の終りに、従つて多分三月頃提出されたものであらう(Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 125)。ところがその頃にはもう後に精神現象學となつて現はれて来る書物の印刷は始められてゐたのである。その出版契約がいつ頃成立したかは、今日はその契約書が失はれてゐるため精確には知り得ないが、ヘーリングは一八〇五年から六年にかけての冬のことであらうと推定してゐる(Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 122)。が前にも引用した一八〇六年八月六日付のニートハンマーに當てたヘーゲルの手紙から知られるやうに、現象學の印刷は既に二月に始められてゐる。とすればその出版契約は當然それまでに成立してゐたのでなければならぬ。ところが三月に出された

管の上記の夏學期の講義豫告の中には、まだ「現象學」の名は出てゐない。そこには、「近く出るであらう學の體系」とあるだけである。そしてその内容は「思辨哲學或は論理學」だけであつて、その頃ヘーゲルが「實在哲學」と呼んでゐた自然哲學と精神哲學とは、「口述で講義するであらう」とあつて、印刷中の「學の體系」の中には入れられてゐない。そしてそこには「思辨哲學或は論理學」とあつて、いつも「論理學と形而上學」と並べ稱せられる「形而上學」が落ちてゐるが、これは偶然の脱落であらう、とヘーリングは解してゐる (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 123)。と云ふのは、右に引用したヘーゲルの各學期毎の講義表からも知られるやうに、イェナに來てからのヘーゲルはいつも必ず「論理學と形而上學」と並べ稱して、兩者をいつも一緒に取扱つてゐる。尤もこれはニュールンベルク時代になると「論理學」の一本に統一されるのであるが、イェナ時代には最後まで「形而上學」が残つてゐたやうで、このことは、次の一八〇六年から七年にかけての各學期の講義表でも、またその次の一八〇七年の夏學期の講義表を見ても、そこにはやはり「論理學と形而上學」とあつて、兩者がやはり一緒に取扱はれてゐることが知られる。且つまたニュールンベルグの大論理學や哲學豫備學の草稿以前には、特殊な形而上學の部分を持たないただの論理學だけの草稿は、確實には知られてゐない、と云ふことも一つの證據になる、とヘーリングは言つてゐる (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 123)。がそれはとゞかく、その「近く出るであらう

學の體系」の主内容が「論理學」であつたことは明かである。ところがその頃實際印刷されてゐたのは、「論理學」ではなくして今日の現象學の前半、即ち「意識の經驗の學」の部分であつた。この「意識の經驗の學」は論理學への「導き入れ」、それへの「入門」の意味を持つものである。尤もこれは、論理學を初學者にも分かりやすくやさしく説くと云ふ形に於ける普通の意味の論理學入門や序説ではなくして、所謂世間で言ふ論理學への「手引」と云ふやうなものではなくして、我々の意識がその自然的直接的な形態から、現象學自身の中で使はれてゐる用語を以て言へば、所謂「現象的知識」の形態から、ヘーゲルの規定に於ける論理學の立場にまで、即ち「絶對的知識」の形態にまで自己を育成して行く意識の自己教養の運動を、意識の自己經驗の道程を跡づけるものである、これがヘーゲルの謂ふ「意識の經驗の學」である。そしてこの「意識の經驗の學」が、その頃復活祭までにその前半の印刷を終ると云ふ約束の下に印刷されつつあつたその書物であり、後に「精神の現象學」となつて完成される書物である。これより外にヘーゲルがその頃印刷させつつあつた書物はなく、従つて「近く出るであらう學の體系」として豫告され得る書物も、これ以外にはない筈である。そしてこの「意識の經驗の學」は既に印刷されつつあつたにも關はず、講義表の中にその名も出されてゐない。そこにはただ『思辨哲學或は論理學を、近く出るであらう自著「學の體系」で、自然哲學と精神哲學とを口述で、講義するであらう』とあるだけである。とすれば、既に印刷されつつあつた

「近く出るであらう學の體系」は、「思辨哲學或は論理學」が主内容で、「意識の經驗の學」はそれへの「導き入れ」、「入門」に過ぎなかつたのであつて、講義表の表面にも出されない程の軽い意味のものでしかなかつたのである。ところが其れが書かれてゐるうちに大きくなつて行つて、終には今日の「精神の現象學」になり、「論理學」を押しつけて、それだけで獨立した一卷の書物になつてしまつたと云ふのである。それでヘーリングは、『現象學は、ヘーゲルに於て念入りに熟考され、長い間胸中に抱かれてゐた計畫に基づいて、彼のそれまでの發展から有機的に生じたものではなくて、極めて唐突な、內的外的の壓迫の下に固められた決心の結果として、殆んど信することも出来ない程の短い期間の間に、而も印刷するために一部分づつ次々に書きつがれて行つて出来あがつたもので、その間意向も決していつも同一であつたのではない、』と言ふわけなのである (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 119)。

それで右に述べて來たことを纏めて言へば、ヘーゲルが一八〇一年八月イェナ大學の教壇に立つやうになつてから、先づ一卷の纏まつた書物として出さうとしたのは、「論理學と形而上學」であつた。これは前にも述べたやうに、後にニールンベルグ時代の大論理學に連なるものである。ヘーゲルの論理學への意圖が如何に根強いものであつたかが想像される。これは精神現象學を書いてゐる時でも同様で、ヘーゲルの眼はいつも現象學を越えて論理學に注がれてゐた。出来上つた大現象學の全體も、やはり依然として論理學への道を開くものと規定されてゐる。

ところが一八〇三年から五年の頃になると、ヘーゲルの企圖する著書は哲學の全體系にまで擴大されて、「論理學と形而上學」の外に、自然哲學や精神哲學をも含んだものになる、一八〇五年の夏學期の講義豫告を見ると、そこでは「自然法」がまだ獨立の一部門として「哲學の全學」(ota philosophiae scientia)の中に含まれることになつてゐる。がこれはその頃から精神哲學の中に吸収されて行く。そして自然哲學と精神哲學とは「實在哲學」として總括されて——次の一八〇五年から六年にかけての冬學期の講義豫告ではさうなる——「思辨哲學」「論理學と形而上學」を含むに對立させられる (Hofmeister, Einleitung des Herausgebers, S. XXXII.)。そしてこの全體を一冊の書物に纏めて出さうと云ふのであるから、これは正に後の「哲學總論」を想はせる書物である。私は先にヘーゲルの論理學に對する意圖が如何に根強いものであつたかを述べたが、ここには後の哲學總論的著作に對するヘーゲルの同様に強い意圖を窺ふことが出来る。ところが越えて一八〇六年の春になると、この著作計畫はまた縮小されて、自然哲學と精神哲學とはそれから除外され、「近く出るであらう學の體系」の内容は、また初めと同様「思辨哲學或は論理學」だけになる (一八〇六年夏學期の講義豫告)。これが現象學の前半が印刷され始めてゐた頃 (一八〇六年三月頃) ヘーゲルの持つてゐた著作計畫である。そしてその頃印刷されてゐた「意識の經驗の學」は、この「論理學」に對する「入門」でしかなかつた。ところがこの入門が、「書かれてゐるうちに、」ヘーゲルの意圖と企畫とに反

して、ひとりで大きくなつて、終に一卷の獨立した大著「精神の現象學」になり、本尊の「論理學」を押しつけてしまつたと云ふのが實狀である、とこのやうにヘーリングは解釋するのである。この反計畫的、無統制的な現象學の成立の事情は、出來上つた精神現象學の上にもなほその痕跡を留めてゐる。例へば、現象學が二つ或は三つの表題を持つことや、章節の區分が二重になつてゐること等々。この後者については、既に初めの方で述べたこと以外附け加へることはないが、前者については、もう一つ次のことを指摘して置きたい。それは、最初に與へられたものと推定される「意識の經驗の學」と云ふ表題には、「第一部」(Erster Teil)と云ふ限定詞が附けられてゐる、と云ふことである。さうすると當然「第二部」があつたわけであるが、その「第二部」は言ふまでもなく前に述べたことから推して「論理學」でなければならぬ。そしてこの「論理學」の方が實は最初はこの書物の主内容となるべきものであつた。それが途中でこの書物から押出されて、この書物はただ「第一部、意識の經驗の學」だけになつたのである。そしてこの始めの方の部分は、まだ後半が書かれないうちに、出版契約に従つて早くから印刷されてゐたので、「第二部」のない「第一部」だけの書物になつたわけなのである。

(一) ヘーリングの成立史の見解に對して批判的なグロックナームも、『この表題が、ヘーゲルはそれを後には取除きたがつたが、始めのものであつたやうである』と言つてゐる (Hegel, II. S. 416)。

三 成立の過程

このやうに、精神現象學は始めから「精神の現象學」を書かうと云ふ計畫の下に書き出された書物ではなくして、「論理學」を主内容とする書物を書かうとしてそれへの「入門」を書いてゐるうちに、その「入門」が始めの意圖と計畫とに反して大きくなつて行つて、終に本論を押し除けてそれ自身で獨立した一卷の書物になつて成立したと云ふのである。がこのやうにして出來上つた書物は、當然最初の「入門」の枠を破るものを持つてゐる。それで最初この「入門」の部分に與へられてゐた「意識の經驗の學」と云ふ名稱も、出來上つた書物には最早合はなくなつたのである。そこでヘーゲルはこの書物に新に「精神の現象學」と云ふ名稱を與へた。この名稱がこの書物の内容に本當に妥當であるかどうか、それについては後で觸れる。ここではこの名稱がいつ頃與へられたか、それを先づ調べてみたい。ヘーゲルの書き残した文書の中にこの名稱が始めて現はれるのは、一八〇六年から七年にかけての冬學期の講義豫告の中に於てである。尤もカール・ヘーゲルの編輯した舊い書翰集の中には、一八〇五年五月頃のものとして推定されるフォス宛の書翰の中に、次のやうな語句が見出される、『もつと大きな著作(精神の現象學)を秋には哲學體系として出すやうになりませう』と。がこの語句については問題がある、とヘーリングは言ふ (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 130)。

ふのは、この手紙はカール・ヘーゲル自身も既に断わつてゐるやうに (Brieft von und an Hegel, I. S. 53)、實際送られた手紙の原文に基づいて収録されたものではなくして、最初はヘーゲルの死後友人たちの手によつて出されたヘーゲル全集の第十七卷の雜論文集第二卷の中に、ヘーゲルの草稿に基づいて収録されたものである。カール・ヘーゲルの書簡集のものは、それをそのまま轉載しただけのものである。その最初の根據になつたヘーゲル自身の草稿は、もう遺稿の中に見出されない、とカール・ヘーゲルは言つてゐるが (Brieft von und an Hegel, I. S. 53)、實はそれは今日ベルリンのプロシヤ國立圖書館に保存されてゐて、ホフマイスターの編輯になる新しいヘーゲル書翰集には、それがそのまま完全に収録されてゐる。それによると、最初ヘーゲルの死後友人たちの手によつて出された雜論文集の中に載せられてゐるもの元になつたヘーゲルの草稿は三つあつて、何れも下書の下書で、最後の下書は、従つて實際出された手紙の直接の草稿になつたものは、失はれたものと考へられねばならぬ、とホフマイスターは言つてゐる (Brieft von und an Hegel, I. S. 457)。ところがこの雜論文集の編輯者たち (フリードリッヒ・フェルスターとルドヴィヒ・ブーマン) は、その三つの草稿を、「ハイデルベルクのヨハン・ハインリッヒ・フォスにあつた書簡の草稿から」と云ふ見出の下に、それらを繋ぎ合はせてただ一つの全體的な草稿であるやうな風に載録した (Hoffmeister, Brieft von und an Hegel, I. S. 457)。そこに既に無理がある。三つの違つた下書を、その

うちの二つはそれぞれ一枚の紙に書かれてゐる。残りの一つは、これが一番主なるもので、ホフマイスターはこれを「主稿」(Hauptentwurf)と呼んでゐるが、これは後にもまた觸れるやうに、精神現象學への小さな一断片や、講義(一八〇五年の夏學期の)の開始を一週間延期してほしいと云ふことを聽講學生たちに知らせる告知文の下書などと同じ紙に書かれてゐる。このやうな三つの違つた下書を、編輯者が勝手に繋ぎ合はせて一つのものにしたのである。その際無論多くの部分が削除され、若干の語句が補正されてゐる。つまり編輯者の手が相當に加へられてゐるのである。このことは、カール・ヘーゲルの書翰集に載せられてゐるものと、ホフマイスターのそれにヘーゲル自筆の草稿から採録されてゐるものとを讀み比べて見れば、すぐ了解されることである。それで、『もつと大きな著作(精神現象學)を秋には哲學體系として出すやうになりませう』と云ふ語句の中の括弧内の「精神現象學」も、編輯者が加へたものではないか、とさうヘーリングは推断するのである (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 131-132)。その理由として、彼は三つのことを擧げてゐる。一つは内容の上から、この「もつと大きな著作」を「精神現象學」とすることは、この著作の實質に合はない、と云ふのである。と云ふのは、精神現象學は、すぐ次に述べるやうに、ヘーゲルに於てそれ自身まだ獨立した哲學體系ではなくして、體系への「前説」(praenisa) 或は「入門」(Einleitung) でしかないのである。ところが「秋に出されるであらうもつと大きな著作」は、明か

に「哲學體系として (als ein System der Philosophie)」とある。そしてこの頃ヘーゲルが自分の哲學體系の全體を一冊の書物に纏めて出さうとしてゐたことは、先に明かにしたやうに彼の各學期毎の講義表からも、またその頃の友人たちの手紙からも、疑ひやうのない事實として認められる事柄である。とすれば、この『もつと大きな著作 (精神現象學) を秋には哲學體系として出すやうになりませう』と云ふ語句は、それからその括弧の中を除けば、正にその頃ヘーゲルのあつた状態に完全に一致する。とヘーリングは言ふ (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongreß, S. 131)。次に、括弧の中の「精神現象學」には die Phänomenologie des Geistes と定冠詞がつけられてゐるが、定冠詞は本來或ことを既に知つてゐる人に向つて、その知つてゐることに就て語る場合に使用されるものであるから、ここで定冠詞を付けて括弧の中に「精神現象學 die Phänomenologie des Geistes」と挿入したのは、既に精神現象學がヘーゲルの天才的な大著であることをよく知つてゐる後の人々を念頭に置いて、その人々のために編輯者が氣をきかせてさうしたのであらう、とやうヘーリングは推斷する (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongreß, S. 131-132)。第三に、ヘーゲルは一般に括弧を使はない、とヘーリングは言ふ (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongreß, S. 131)。これはヘーゲル自筆の文書や草稿を見たことのない私には何とも言へないことであるが、ただこの書簡に關する限り、この括弧も多分編輯者が後から加へたものではないか、と云ふ推定に賛同させられる

他のもう一つの同じやうな事例を擧げることが出来る。それは、カール・ヘーゲルの編輯した舊い書簡集に載せられてゐるこの同じ書簡の中に、この問題の箇所の少し前の方に、「若し私が學問に於てどう云ふことを成し得るであらうか、それに就て語れと言はれるならば、私は公正な批判者に對して試論として出した (批評雜誌の中に) 最初の門出の諸論文以來、云々」と云ふ句がある。これをホフマイスターの新しい書翰集で見ると、文章も相當に違つてゐる上に、ここにもやはり「批評雜誌の中に in dem kritischen Journal」と云ふ括弧の中の語句がないのである。ホフマイスターは先にも述べたやうに、ヘーゲル自筆の草稿から直接採録したのであるから、ヘーゲル自身の草稿にもこの括弧の中はないわけである。それがカール・ヘーゲルの舊い書翰集の中にあるのは、多分その元になつたフェルスター、ブーマンの雜論文集の中にあるから、それをそのまま轉載したものであらう。そして若しそれがこの論文集の中にもあるならば、それは先にも述べたやうに、この論文集の中に出されてゐるこの手紙は、もともとヘーゲル自身の草稿をそのまま忠實に再録したものでなくして、三つの違つた草稿があるのを、編輯者が勝手に糺ぎ合はせて一つの纏まつた手紙のやうにしたものである、そしてその際編輯者の手が相當に加へられてゐる、と云ふやうな事情から推して、この括弧の中の語句もやはり編輯者の加へたものではないか、とさう推測される。と云ふのは、ここで「批評雜誌 das kritische Journal」と呼ばれてゐるのは、言ふまでもなくヘーゲルがイェナに來てから間も

なくシェリングと協同して出した「哲學批評雜誌」(Kritisches Journal für die Philosophie) のことであらうが、その中に出されてゐる論文ならば、一八〇五年の春までイエナにゐて、當時ハイデルベルクに移つてゐたフォスは、かねてから知り過ぎる程よくそれを承知してゐる筈であるから、特に括弧を用ゐて「批評雜誌の中に」と教へてやらなくてもよいであらう、これは全く間の抜けた蛇足である、にも關はずわざわざ括弧を用ゐて「批評雜誌の中に」と親切に示してやつたのは、寧ろ「哲學批評雜誌」のことを知らない後の人々を念頭に置いて、云ふ人々のために特にイエナ時代の初期の諸論文の掲載されてゐる雜誌の名前を示してやつたものではないか、とさう推測される。さうすると、問題の箇所「もつと大きな著作(精神現象學)……」に關しても、やはりヘーリングの見解に賛成したくなるのである。

それで、このフォス宛の書翰の中に出て来る「精神現象學」が編輯者の後から加筆したものとして除外されるならば、「精神現象學」と云ふ名稱がヘーゲルの書き残した文書の中に始めて現はれるのは、先に述べたやうに一八〇六年から七年にかけての冬學期の講義豫告の中に於てである。この講義豫告は、クノー・フィッシャーがその近世哲學史の中にイエナ大學の講義表から轉載してゐるものの中には缺けてゐるが、その後マックス・ヴントがイエナ大學の講義表を再調査したところ、これが發見され (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 122) 、『そのドイツ語譯も——講義豫告の原文はラテン語で書

かれてゐる——一八〇六年九月二十日の「イエナ一般文學新聞」の廣告欄に掲載されてゐることが今日は確かめられてゐる (Hoffmeister, Einleitung des Herausgebers, S. XXXIII) 。

そこにはかうある、『(a) 論理學と形而上學或は思辨哲學を、それには精神の現象學が前説 (praemissa) されてゐる、それを近く出るであらう自著學の體系第一部で、(b) 自然哲學と精神哲學とを口述で、講義するべからう』と (Hoffmeister, Einleitung des Herausgebers, S. XXXIII. Haering, Die Entstehungsgeschichte der Phenomenologie des Geistes, Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 123) 。

これは一八〇六年から七年にかけての冬學期の講義豫告であるから、慣例上早くても前の夏學期の終り、従つて多分一八〇六年の八月頃に書かれたものであらう、とヘーリングは推定し (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 122) 、『ホフマイスターはそれを發表の時期として、ヘーゲルがこれを提出したのはそれから更に幾週間か乃至は幾月か溯るかも知れない』と補正してゐる (Hoffmeister, Einleitung des Herausgebers, S. XXXII) 。

『手紙の中へ、始めて「現象學」の名前が現はれるのは——ただ一つの、後でなほ論ずる、そしてただ表面さう見えるだけの例外を除けば——やつと一八〇六年八月ニートハニマーに當てた手紙の中に出て来るのが最初である』とヘーリングは言つてゐるが (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 126) 、『一八〇六年八月六日附のニートハニマー宛の手紙の中には「現象學の名前」は出てゐない。がこの手紙

は、例のゲーブハルトとの交渉に手を焼いたヘーゲルがニートハンマーに仲裁を頼んだ手紙で、その中の、『印刷は二月に始められてゐる、最初の契約に従へばこの部分は復活祭までに出来上らねばならなかつた』と云ふ「この部分」は、明かに現象學の前半を意味する。そして後半分の原稿を早く渡してもらひたい、いや最初の契約に従つて先づ原稿料を支拂つてほしい、と云ふのが紛争の原因になつたのであるから、この手紙の中では明かに現象學の全體が考へられてゐる。そしてヘーリングが言ふやうに、「この手紙より前にも後にも、この手紙に答へた日附された手紙があるので、日附されない手紙はあり得ない」のであるならば (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongreß, S. 126)、現象學(S.)がヘーゲルの書簡の中に現はれるのはこれが始めてである。とすれば、先に述べた一八〇六年から七年にかけての冬學期の講義豫告と考へ合はせて、ヘーゲルに於いて精神現象學の構想が固まり、その名稱が定まつたのは、大體一八〇六年の夏七月から八月の頃であつたと推定される。がこの「現象學」(Phänomenologie)と云ふ語は、その頃のドイツの哲學界に於ては決して珍らしいものではなかつた。始めてこれを使用したのは、カントとも交際のあつたランベルトであるが、その後ヘルダーも、カントも、フィヒテもこれを用ゐてゐる。ランベルトは、一方「眞實なるもの」(das Wahre)から區別されると共に、他方また「虚偽なるもの」(das Falsche)からも區別される眞と偽との中間物としての「假象」(der Schein)の學を考へて、それを「現象學」と呼んだ。ヘルダーは

精神現象學の成立史

この考へを美學の中に引入れて現象學を美學と結びつけ、美の現象の學としての「美學的現象學」(eine ästhetische Phänomenologie)や「美と眞との正しい現象學」(eine rechte Phänomenologie des Schönen und Wahren)を考へた。カントは「自然科學の形而上學的基礎」の中で運動の現象を取扱つた部分をやはり「現象學」と呼んでゐる。これはヘーゲルの「精神の現象學」に對して言はば「自然の現象學」と解してもよいであらう。フィヒテは、「眞理の學」(Wahrheitslehre)としての知識學の裏側をなして、知識學で意識から消滅せしめられた現象世界を、それは眞實に於ては意識であるが、實際は意識でないやうに見える。その現象世界を意識から導出する「現象の學」(Erscheinungslehre)或は「假象の學」(Scheinlehre)を考へて、それをやはり「現象學」と呼んでゐる(Hoffmeister, Einleitung des Herausgebers, S. VII—XIV)。これらの先行思想家の蹤跡の中には、それぞれヘーゲルの精神現象學に繋がるものかを見出すことが出来る。殊にカントは、右に述べた自然の現象學の外に、形而上學に先行する「一般現象學」(phänomenologia generalis, Phänomenologie überhaupt)の構想を持つたことがあるらう。これはヘーゲルの「論理學と形而上學に前説される精神現象學」の構想に極めて近い。がカントではこの現象學はただ一時構想されただけで、實際には書かれなかつた。彼は現象學の道を棄つて理性批判の道を選んだ(Hoffmeister, Einleitung des Herausgebers, S. XIV)。ヘーゲルの精神現象學はカントで棄つられたこの現象學の理念を復活し

六五

實現したものと見られてもよいであらう。がカントが考へたのは「一般現象學」であつて「精神の現象學」ではなかつた。「精神の現象學」はカントも他の先行思想家の誰も考へ及ばなかつた全く新しい哲學の道である。その眞實の創始者はヘーゲルである。そしてその構想と名稱とが彼の頭の中で固まつたのは、右に明かにしたやうに、大體一八〇六年の夏七月から八月の頃であつたやうである。

(一) この講義豫告のラテン語原文及びイェナ一般文學新聞に掲載されたそのドイツ語譯は、今日ホフマイスターの編輯になる新しいヘーゲル書簡集の第一卷第七十二書簡(一八〇六年十月六日附ヘーゲルからニートハンマーに當てたもの)の註の中にも採録されてゐる。

がそれでもまだこの講義豫告の中では、『論理學と形而上學或は思辨哲學を、それには精神の現象學が前説されてゐる、それを近く出るであらう自著、學の體系第一部で、講義するであらう』とあつて、その「近く出るであらう自著、學の體系第一部」は、「精神の現象學」ではなくして、「精神の現象學が前説されてゐる論理學と形而上學或は思辨哲學」であるやうになつてゐる。これは「イェナ一般文學新聞」の廣告欄に掲載されたドイツ語譯のものを見てもさうなつてゐる。そこにはかうある、『先行してゐる精神の現象學を持つた思辨哲學或は論理學と形而上學をヘーゲル教授は自分の教科書によつて……』と。それでこれだけではまだ、「近く出るであらう自著、學の體系第一部」が、論理學を含むのか含まないのか、まだ分からな

い、とホフマイスターは言ふ(Enleitung des Herausgebers, S. XXXIII)。がこれは次の一八〇七年夏學期の講義豫告とも對照して、次のやうに解釋することが出来るはしないかと思ふ。この夏學期の講義豫告にもやはり、『論理學と形而上學を、それには精神の現象學が前説されてゐる、それを自著學の體系第一部(バンベルクとヴェルツブルクのゲーパルト書店、一八〇七年)から講義するであらう』とある。これは夏學期に對する講義豫告であるから、ヘーリング流に推定すれば、大體一八〇七年の三月頃に提出されたものと推定されるが、その頃にはもう精神現象學は大體出來上つてゐたのである、尤もそれが完全に出來上つて世に出たのは翌四月であるが。それで、この講義豫告の中の「自著學の體系第一部」は、これは明かに「前説されてゐる精神の現象學」であつて、「論理學と形而上學」ではないのである。そして實際完成された精神現象學も、「ゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリッヒ・ヘーゲルの學の體系、第一部」として世に出された。それにも關はず、講義豫告は右に譯出したやうに、「論理學と形而上學」が主であつて、「精神の現象學」はそれへの「前説」であるやうになつてゐるのは、講義内容がさうである、と云ふ意味に取るより外はない。さうすると、前の冬學期の講義豫告の「近く出るであらう自著學の體系第一部」も、「前説されてゐる精神の現象學」だけを指すものと解することが出来る。そしてまたこの講義豫告の出された頃、即ち一八〇六年の八月頃は、ちやうどゲーパルトとの紛争の眞最中であつて、それから二ヶ月程して十月の中頃

(正確には十月十三日の夜)には精神現象學の本文は書き上げられるのであるから、この頃にはもう「近く出るであらう自著」の名稱も内容も十分に固まつてゐたのでなければならぬ。

かくて最初論理學への入門として書き出された「意識の經驗の學」が、その最初の意圖と計畫とを破つて獨立した大きな「精神の現象學」に成長したのは、大體一八〇六年の夏七月から八月の頃であつた、と推定されるが、さうするとこの點に關して、現象學の序論の中に一つ妨げになるものが見出される。それは、この序論はその内容の上から見て現象學全體の構成の上から見ても、明かに「第一部、意識の經驗の學」に含まれ、それへの序論として一番最初に書かれたものと考へられるが、その中に次のやうな敘述がある。『が併し目標も進行の系列と同様に知識にとつて必然的に定められてゐる。それは、知識が最早自分自身を越えて行く必要のない所に、知識が自分自身を見出して概念が對象に、對象が概念に一致する所にある。だからその目標への進行もまた止められることが出来ない、それ以前の段階ではいづこに於ても満足は見出されない』と(S. 73)。意識の經驗の歩みには目標が安置されてゐて、その目標に到達するまでは途中で停止することは出来ない、と云ふのである。そしてその目標は、具體的には絶對的知識であることをまたこの序論の結びが語つてゐる。そこにはかう述べられてゐる。『意識は、その眞實の存在に向つて押進むことによつて、それは一つの地點に到達するであらう。そこに於ては、意識がただ自分に對してあるだけの、一つの他なるものとしてあるだけ

の異種のものに附き纏はれてゐると云ふ假象を脱する、或はこの現象が本質に等しくなり、意識の敘述はかくしてこの精神の本來の學であると云ふ點に合致する、そのやうな地點に到達するであらう。そして最後に意識は自ら自分の本質を捕へることによつて、絶對的知識そのものの本性を表はすやうになるであらう』と(S. 80)。この文面から見て、意識の經驗の目標が絶對的知識であることは明かである。とすると、「意識の經驗の學」が始め「五、理性の確信と眞理性」で完了するやうになつてゐたとするならば、この「理性」からすぐさま「絶對的知識」に移る道がなければならぬであらう。これがむづかしい問題になるわけである。

がヘーゲルに於てこれを切抜ける道がないわけではない。それにとつて一番手近な手がかりになるのは、現象學に續いてすぐその次に書かれた「哲學豫備學」である。そこでもやはり精神現象學が論理學の前に置かれてゐるが、この精神現象學は「意識」と「自己意識」と「理性」とを含むだけである。そしてその「理性」も、一八〇七年の大現象學の「C、(A A) 理性」であつて、「(B B) 精神」や「(C C) 宗教」や「(D D) 絶對的知識」を包んだ「C、理性」ではない。のみならず、レーヴェンベルクによつて刊行された哲學豫備學の草稿を見ると、そこには「精神現象學」と云ふ名稱はなくして、その代りに「精神學」(Geisteslehre, Pneumatologie)と云ふ名稱が用ゐられ、そしてその「精神學」は「哲學への導き入れ」として、「精神が學に到達するために通過するいろいろな精神の性質や行動」を、

「精神の意識や行動の諸種類」を「理性」の段階まで観察するのであるが、『その理性は眞理を認識する。』と云ふのは、眞理は概念と定在との一致であるが、理性の規定は物の本質の規定であると同樣に、理性自身の思想でもあるからである。それで理性的觀察に於ては、今までの意識と對象との區別はなくなる。そこには對象性が含まれてゐると同樣に、確信 (die Gewißheit) もそれ自身そこに含まれてゐる』と規定されて、『理性』の表題の下に直ちに「諸々の論理的規定」が、「第一部、客觀的論理學」と「第二部、主觀的論理學」とに分けられて展開されてゐる。即ち理性論は直ちに論理學なのである (Löwenbergs, Hegels Entwurfe zur Enzyklopädie und Propädeutik, S. 15, 23-24, 45-46)。

完成された哲學豫備學では、周知のやうに、この論理學は理性の外に出されて、現象學から獨立させられるのである。もう一つ、理性から直ちに絶對的知識への移りゆきを示すものがある。それは、先に言及したフォス宛の書簡の三つの草稿のうち、ホフマイスターが「主稿」と呼んでゐるものの終りの方の部分と同じ紙に書き残されてゐる「精神現象學への一葉」の断片である。これはフォス宛の書簡との關係から一八〇五年の五月頃のものとして推定されるが、そこには次のやうなことが書かれてゐる。『絶對的知識はかくて先づ最初には立法的理性として登場する。人倫的實體そのものの概念の中には、意識と自體存在 (das Ansichsein) との區別はない。なぜかと云へば、純粹思惟の純粹思惟はそれ自體に於てである。或は自身自身に等しい實體である。そしてそれはまた同樣に意識でもあ

るからである。が併しこの實體にも一つの規定が現はれるのであるから、——そしてその第一の規定は、明かに、法が定められると云ふことである——意識と自體 (das Ansich) との間との區別もまた生ずる。がその自體は人倫的實體そのものである、或は絶對的意識である』と (Johannes Hoffmeister, Dokumente zu Hegels Entwicklung, S. 353)。この「立法的理性」(gesetzgebende Vernunft) は、一八〇七年の完成された精神現象學では、「査法的理性」(gesetzprüfende Vernunft) と共に、「C」(AA)「理性」の最終の段階をなして、それから「(BB)精神」に移り行かされるのであるが、それがこゝでは既に絶對的知識の最初の段階として取扱はれてゐる。これらの資料から推して、主觀的な理性からすぐさま絶對的知識に移りゆく考へも、ヘーゲルの思惟の中に或時期には存在したことが窺はれる。それで、『ヘーゲルは最初一八〇六年にもやはり入門をすぐさま論理學に移り行かせようとしたのではなかつたか』とヘーリングは疑問を投じてゐる (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 136)。またホフマイスターは、完成された一八〇七年の精神現象學に於ても、「五、理性の確信と眞理性」の章の「論理學的法則と心理學的法則」の節の中に、やはり主觀的な理性からすぐさま論理學に移りゆく考への痕跡が認められる、と言つてゐる (Einleitung des Herausgebers, S. XXXIII)。

(一) この草稿の原物は、哲學總論のそれと共に、今日ハーヴァード大學に保存されてゐる。これは大體一八〇八年から

九年に書かれたものと考へられるが (Hofmeister, Einleitung des Herausgebers, S. XXXIII) 'リーニングはその中には一部現象學より古いものがありはしないか、とも言つてゐる (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 136)。

だから、主観的な理性からすぐさま絶対的知識に移る道も、ヘーゲルに於て全然考へられなかつたわけではない。眞實なる知識の成立する「元素」(Element)は概念であるが、その概念は確に理性に於て一應完成される。が主観的理性の作る概念はやはりまだ主観的であつて客観的實在性を缺く。これではまだ眞實の概念とは言はれない。眞實の概念は客観的な世界の現實を自分の實在として持つのでなければならぬ。絶対に自分自身に對立するものの中にあつて、自分自身の許に留まるのでなければならぬ。そのような概念は精神の客観的現實を媒介にして始めて完成される。それで絶対的知識になるためには、精神は客観的現實の媒介を経なければならぬ。このことなくしては、精神は主観的精神に止まつて、眞實の絶対的精神にならぬ。或は單なる意識の段階に止まつて、眞實の學にならぬ。これではヘーゲル哲學の眞實にヘーゲル的なものは失はれる。ヘーゲル哲學をその先驅者たちのそれから區別する最も獨創的なもの一つは、精神の客観的現實を媒介にした絶対的精神の哲學であること、即ち絶対的觀念論であることである。主観的理性の立場に立ち停まつてその上に哲學を立てるのは、カント・フイヒテ的な主観的觀念論の立場である。反省哲學或は意識の哲

精神現象學の成立史

學の立場であつて、精神の哲學の立場ではない。この點から見ても、主観的理性からすぐさま絶対的知識に移ることは、まだカント・フイヒテ的な立場に立ち停まることである。それで、「C」(A)理性」から「(B)精神」に進み出ることは、ヘーゲルの思惟にとつては必然の成行であつて、こゝで「意識の經驗」の歩みを停めることは出来ない。がこのことは既に「意識の經驗の學」に於て始めから豫想されてゐたことではなかつたか。と云ふのは、「A、意識」の現象はまだ全く個別的意識の經驗として取扱はれてゐるが、「B、自己意識」の現象になると、その經驗はもう單なる個別的意識の内面を出て共同的客観的なものになる。ヘーゲルの自己意識と云ふのは、カントやフイヒテの「我思ふ」とか「我は我である」と云ふやうな、單なる個別的意識の自己内反省の現象には止まらないで、實在的な自己意識對自己意識のあり方である。自己意識の共同存在である。この自己意識對自己意識の關係に於て、自己意識の獨立性とか非獨立性、自己意識との鬭争とか自己意識相互間の承認の運動とか、主人と奴隸との關係と云ふやうな現象が展開される。この自己意識の現象は共同的社會的である、客観的現實的である。そしてこの客観的現實的であると云ふこと、社會的であると云ふことがヘーゲルの精神概念の特色である。それでヘーゲルは既に「B、自己意識」の章の序論的な敘述をしてゐる箇所を末段で、自己意識の中に既に精神の概念が現はれてゐることを説いて次のやうに言つてゐる。『かくて我々に對しては既に精神の概念が存在してゐる。意識に對してこれから生ずる

ことは、この精神が、この絶對的なる實體が、それはその中でそれに對立するものの、即ちそれぞれ自己存在する異なつた自己意識の、完全なる自由と自己獨立性との中にあつて、それらの自己意識の統一である所のこの絶對的なる實體が、我々である所の我であり、我である所の我々たるこの精神が、何であるかと云ふことの經驗である』と(S. 147)。「(B B)精神」以下の運動は正に「この精神が何であるかと云ふことの經驗」の具體的なる展開に外ならない。それで、若しヘーリングやホフマイスターが解するやうに、ヘーゲルが最初論理學への入門として「意識の經驗の學」を書き始めた時、まだ「(B B)精神」以下の發展を全然豫想してゐなかつたとすることは、「B、自己意識」の現象の捕へ方や取扱ひ方を顧みると、どうもあり得ないことのやうに思はれるが、それでも事實はやはりさうであつたと言ふならば、それはまだその頃にはヘーゲルの思惟が十分ヘーゲル的なるものまで成熟してゐなかつた、そしてそれを書いてゐるうちにヘーゲルの思惟は眞にヘーゲル的なるものに成熟して行つた、と解するより外はない。が「C、(A A)理性」から「(B B)精神」以下への發展が思惟の内面的必然であるならば、従つてまた「意識の經驗の學」から「精神の現象學」への發展が思惟の内面的必然であるならば、この思惟の成熟がヘーゲルに於てこの書物の著作中に行はれたか、それともそれ以前から豫め準備されてゐたかは、最早この書物の内容の理解にとつてはさほど重要なことではなくなる。さうしてまたこの發展が思惟の必然であるならば、たとひ著作中に構想や

計畫の變更があつたとしても、そのために敘述に龜裂や破綻が生じたと云ふやうなことはないであらう。ただこの思惟の成熟が著作中に行はれたとするならば、そしてそのために始めの構想や計畫を變更するべく餘儀なくされたとするならば、そのためにいくらか豫期しなかつた時間を必要とし、その上終りの方「(C C)宗教」や「(D D)絶對的知識」の部分になると、原稿送付の最後の期限の嚴しい約束のために筆を急がねばならなかつた餘儀ない事情も加はつて、思想や表現を十分に推敲する餘裕なく、明かに走り書きに陥つてゐる形跡のあることは覆はれない。これはヘーゲル自身も認めてゐたことで、現象學が出来上つてからシェリングにその献本の寄贈を告げた手紙(一八〇七年五月一日附)の中にも、『最後の部分の甚だしい不出来は、どうか貴兄の寛容さで、僕が原稿の作成をどうにかイェナ會戦の前夜半に終つたと云ふことで、大目に見ていただきたい』と書いてゐる。

それで、精神現象學が始めから「精神現象學」と云ふ表題の下に、十分に練られた構想と計畫とを以て書き出され書き上げられたものと見るか、それともヘーリングやホフマイスター等が考へるやうに、最初は「論理學と形而上學」を主要内容とする哲學體系の第一部を書かうとして、その「序説」の部分即ち「意識の經驗の學」の部分を書いてゐるうちに、それがひとりで成長して途中から「精神の現象學」になつたと見るかは、この著作の内容自體の哲學的理解にとつてはさ程重要なことではなくなる。ただこのことに關聯してひとつ問題になるのは、この

著作が二つの違つた表題を持つと云ふことと、「精神の現象學」と云ふ最後に與へられた表題が、この著作の内容に十分妥當であるかどうかと云ふことである。最初この著作の前半の部分が書き出された時、少くともこの部分には「第一部、意識の經驗の學」と云ふ表題が附けられてゐたと云ふことは、今日殆んどすべての現象學研究者たちが一致して認めてゐることである。これは、ヘーリングの成立史に對して肯定的なホフマイスターやイポリットは固より——わが國の金子博士もさうである——それに對して批判的なグロックナーも、この點に關してはヘーリングに贅意を表してゐる (Hegel, II. S. 416)。この表題は、すぐそれに續けられる序論の敘述に照らしても、確かに現象學の前半即ち「C、(A A) 理性」までにはよく妥當する。が「B B) 精神」以下の後半に對しては、それが前半から自然に、内面的必然性を以て成長し出でたものであるにも關はず、この名稱は十分に妥當であるとは言へない。と云ふのは、「B B) 精神」以下は、ヘーゲルのその頃の用語を以て言へば「現實的なる精神」に、後の精神哲學の用語を以て言へば「客觀的精神」に關はつて、單なる主觀的な意識の現象には止まらないからである (Phänomenologie, S. 336)。だからこそ、ヘーゲルも出來上つた書物に新に「精神の現象學」と云ふ別の表題を與へたのであらう。この名稱は確かに「意識の經驗の學」と云ふ名稱よりか、出來上つた現象學にとつてよりふさはしいものであることは争はれない。ただこの「精神の現象學」と云ふ概念については、嘗て務臺博士がその「ヘーゲル研究」の中で(七頁

——九頁) 問題にされたやうに、自己矛盾を含みはしないかと云ふ疑念が起る。と云ふのは、ヘーゲルに於ては、精神ならばそれは本來ただの意識や現象ではなくして客觀的の現實であり、實在する世界である。とすれば、精神については本來「哲學」があるべきであつて、「現象學」は成立しない。現象學ならば「意識の現象學」であるべき筈である。が出來上つた精神現象學の全體を「意識の現象學」と呼ぶことは妥當でない。「意識の現象學」ならば「意識の經驗の學」の部分、即ち現象學の前半に止まらねばならぬ。そこは正に「意識の現象學」であるが、後半は單なる意識の現象に關はるのではなくして精神の現實に關はる、實在する客觀的な世界に關はる。とすれば、そこに成立する學は現象學ではなくして哲學、即ち「精神哲學」であるであらう。それで、出來上つた精神現象學の全體を外面的に見れば、ホフマイスターも言ふやうに (Einleitung des Herausgebers, S. XXXV) それは二つの異なる部分から成る。一つは「意識の經驗の學」(C、(A A) 理性)の章まで)と、もう一つは「精神の哲學」(B B) 精神)の章以下)とから成る、とさう云ふ風に解することも出来る。が併しさうすると、精神現象學は二つの違つた學の纏合せになつて、一つの纏まつた學としての内面的統一を失ひはしないか。がその懸念は無用である、と云ふのは、「思想の大きな引つたくり行力 (die grofartige Geratenheit der Gedanken)」によつてこの二つの部分に分かれると云ふことは内面的に克服されてゐると同様に、またその最後決定的な表題の賦與によつてそれは外面的に

も克服された」のであるからと、ホフマイスターはそのやうに言つてゐる (Einleitung des Herausgebers, S. XXXV.)。この強引な「思想のひたたくり行く力」は、現象學の讀者の等しく感ずるものであるが、これは決して論理を離れたものではない。思想の引つたくり行く力は思想の内面的な索引力である。

前にも述べたやうに、現象學の前半と後半とでは場面が變はる。それにも關はらず、それが現象學の學としての、また著作としての内面的統一の破綻にならないで、前半から後半にかけて思想が無理なく繋がつて行くのは、兩方に互つて同じ論理が、同じ「意識の經驗」の論理が支配してゐるからである。内容自體の連續性が存在するからである。「意識」から「自己意識」へ、「自己意識」から「理性」へと進んで來た「意識の經驗」の歩みは、當然現實の「精神」へ、「人倫的」、「教養的」、「道德的」、「宗教的」等々の現實の「精神」へ進展し出なければならぬ。後の精神哲學の用語を以て言へば、主觀的精神から客觀的精神への移り行きは内容自體の内面的必然である。この點に關して極めて明快な解釋を下されたのは、務臺博士の「ヘーゲル研究」である。それによれば、意識が自己意識であることによつて、意識に於ける抽象的な主觀——客觀の關係が、具體的な我と世界との實存的な關係に轉せられると云ふのである。そして意識が自己意識であることは意識の本性であるから、この轉換推移は意識の經驗の内面的必然性であると云ふのである。現象學自身の敘述の中にこの推移の事由を探せば、先に明かにした自己意識の捕へ方も既にそれを示してゐるが、も

つと明確には理性の概念の規定がそれを必然的にしてゐる。「C、(A) 理性」の章の始めに於つて、一般に「理性」の立場は、「理性は一切の實在であると云ふ意識の確信である」と規定されてゐる。理性は「現實に對して觀念論の態度を取る」意識であると、云ふのである (S. 133)。それで、理性は自分に對してあるものの中に自分自身を見出す。外的世界を自分の存在にする。或は世界を直ちに自分自身とする。がそのためには、世界自身が理性的であらねばならぬ。理性の實在、精神の現實であらねばならぬ。それで「C、(A) 理性」は必然的に「(B) 精神」にならねばならないのである。が理性が精神になると云ふことは、意識が客觀的現實になると云ふことではないか。とすれば、理性から精神に移ることによつて、現象學の立場は失はれはしないか。現象學の立場は意識の元素 (Element) の中にあると云ふことである。すべてを意識の經驗の中に落かして見ると云ふことである。この現象學固有の立場が、現實的な精神についてもなほ維持されることが出来るかどうか、これが問題になるわけである。がこれはむづかしい問題ではない。と云ふのは客觀的精神も意識だからである。客觀的精神は個人に對しては外的存在であり、その普遍的な實體である所のものである。がそれはただの實體や對象的存在ではない。さう云ふものならば、それは精神とは言はれない。精神と言はれる以上は、それは自分自身の内に歸つて自ら自己を知る面を持たねばならぬ。自己内反省の面を、従つて自己意識である面を持たねばならぬ。普遍的精神は普遍的自己意識である。自己意識の共同で

ある。「我々である所の我、我である所の我々」である (Phä-nomenologie, S. 147)。だから客觀的精神も意識にして同時に意識に對してある。その限りに於て、客觀的精神についても現象學的考察が可能であるわけである。それは、自然がそれ自體に於て (an sich) あるのではなくして意識に對して (für) ある時、即ち自然そのものとしてではなくしていろいろな形の「自然の知識」としてある時、自然も現象學的考察の對象になるのと同様である。「C、(A A) 理性」の最初の段階である「A、觀察的理性」は、このやうな意味に於ける自然の現象學になつてゐる。そしてそこに、即ち直接自然の「それ自體」(das An sich) がではなくして、「自然の知識」が考察の對象になされる所に、現象學の自然哲學が本來の自然哲學から區別せらるべき點があるのである。精神についても同様に考へてよいであらう、現象學に於ける實際の取扱ひ方について見ても、「(B B) 精神」の最初の形態である「眞實なる精神、人倫」は人倫的意識の經驗として、また第二の形態である「自己疎外された精神、教養」は教養的意識や啓蒙意識の經驗として、そして第三の形態である「自己確信的の精神、道德」は道德的意識の經驗として展開されてゐる。この點が「精神の現象學」と本來の「精神の哲學」との異なる所である。精神哲學では、精神の結契機が意識に對してあると云ふ關係から解放されて、内容自體の自由な内面的運動として、純粹概念の元素に於て展開される。これに對して現象學では、同じ精神の現實が取扱はれても、いつもそれが意識との關係の中で、意識の對象として意識に對

してある姿に於て考察される。意識の經驗の内容として意識の元素の中で展開される。それで精神現象學の後半を、ホフマイスターがさうしたやうに、すぐさま「精神哲學」と解することは妥當でない。そこは確にヘーリングも言ふやうに、「『ヘーゲルはそれから益々彼が既に前から持合はせてゐた「精神哲學」の手持材料の中から、そして一般にその「全體體系」の中から、出来るだけ多くのものをその中に織り込んで行つた。かくて現象學の終りは——そして一般に第二部の全體は——結局その頃の彼の全體的體系の終りと混同されるまでにそれに似て來た』(Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 120) と言へるばかりでなく、後の客觀的精神や絶對的精神の哲學にも極めて類似したものになつてゐる。が兩者はその立場を異にする。或はその元素 (Element) を異にする。後年の精神哲學と精神現象學とは、同じ精神の現實が取扱はれても、その取扱ひ方が違ふ。現象學には後年の精神哲學にない固有の立場がある。それはすべてを意識の内容として、意識に對して (für) あるものとして見ると云ふことである。だから現象學では、同じ精神の現實が取扱はれても、すぐさま精神哲學にはならないで、やはり現象學なのである。いな寧ろこの部分こそ、ヘーゲルの言葉の嚴密な意味に於て、本當に「精神の現象學」と呼ばるべきものであらう。前半だけならば、「精神の現象學」と云ふ名稱は大きすぎる。寧ろ「意識の經驗の學」とか、または「意識の現象學」と呼んだ方が妥當であらう。それで、イポリットが現象學の成立史に關するヘーリングやホフマイスターの

解釋を受け入れながら、後半の部分を、ホフマイスターがしたやうにさまざま「精神哲學」と解しないで、眞實にヘーゲルの言葉の意味に於て「精神の現象學」であると解し、従つて現象學の成立過程を「個人的意識の現象學」から「精神一般の現象學」への成長と解したのは、妥當な解釋であると考へられる(Hypothèse, Genèse et Structure de la Phénoménologie de l'Esprit, p. 58-59, 65, 71)。そしてこの解釋は、また、現象學の前半から後半への移り行きを、「意識の現象學」から「客觀的精神の現象學」への移行と解される務臺博士の解釋とも一致するわけである(同博士、ヘーゲル研究、七六頁—七七頁、七八頁)。

(未完)

(筆者 佐賀大學文理學部〔哲學〕教授)

次 號 論 文 豫 告

人生の目的……………	チャールズ・ハーツホーン	三小田敏雄譯
アウグステヌスにおける理性と信仰の問題……………	金子晴勇	
精神現象學の成立史(完)……………	米倉守	
——ヘーゲル精神現象學の研究、一——		
クリスチャン・ヴォルフの定義の說について……………	細川董	
——ヴォルフ研究、其の二——		